

知的障害者施設におけるコミュニケーション支援

—動物(アザラシ)型ロボット“パロ”導入の効果—

NPO 法人にんじんの家 代表・昭和音楽大学 講師
田坂 裕子

【はじめに】 動物とのふれあいには、病気の治療や予防、ストレス低減、コミュニケーションを活性化させる、などの効果が指摘されている。しかし、動物は、アレルギーや感染症などの問題もあり、病院や福祉施設での受け入れが難しいことから、動物型ロボットの活用が期待されている。本発表では、動物(アザラシ)型ロボット「パロ」を導入した知的障害者施設での、施設利用者のコミュニケーション行動を観察し、言語表出に困難がある利用者(対象者1名)の変化を報告する。

【方法】1. **動物(アザラシ)型ロボット「パロ」**: タテゴトアザラシの赤ちゃんがモデル。視覚、聴覚、触覚、運動感覚センサーをもち、触れ合うことで反応の仕方を変える(行動を学習する)。

2. **導入場所・導入方法**: 日中支援を提供する知的障害者施設(生活介護事業所)。パロの施設内の配置場所や使用時間は、施設利用者が自由に使用できるよう、特定せず。自然場면을観察するため、施設職員の行動は統制せず、パロを通して利用者がコミュニケーションをしかけた時は、自由に応じることとした。

3. **対象者**: 知的障害(ダウン症)30歳後半の女性(以下、Nとする)。退行現象あり、以前は会話が可能であったが、現在は一語文での発話が僅かで、自発的なコミュニケーション行動が乏しい。

4. **観察方法**: 対象者とパロとの行動を所定の用紙に記録。パロの施設への導入約1年間のうち、導入時(初期)・5か月後(中期)・10か月後(後期)を観察対象とした。

【結果】1. **導入時**: Nは、怖がってパロに近づかず、触ろうとしなかった。1か月後、じっと見つめて微笑む行動が生じる。その数日後、Nはパロを覗き込み「パロ」(一語のみ)と話しかけるようになる。職員はそれを見て「わー!Nさんよかったね」と言及するが、Nが職員に話しかける様子はなかった。

2. **中期**: Nはパロのそばで微笑み、パロも見つめる(アイコンタクトが成立)。一人の利用者M(会話可能)がパロに近寄り話しかけ、Nに「触ってみる?」と誘う。その後、NとMは、2人でパロを見つめ(共同注視)笑顔になり、2人でパロを撫でるといったパロを共有する行動が認められた(三項関係の形成)。

3. **後期**: Nはパロを見て「かわいい」と言いつつも、声をたてて笑う行動が出現。職員がパロを近づけるとNが「きゃっきゃっ」と笑う。Nが頭をなでながらパロに話しかける「パロ、・・・」(二語文、発音不明瞭)。Nは「コチョコチョコ」とパロをくすぐり、笑顔で「いいいいこ」と頭をなでる。パロが首を振ると、Nも首を振るといった模倣行動が出現した。

【考察】 導入時は、Nとパロ(自分と対象物)との二項関係でのやり取りがあったものの、他者(施設職員など)の相互交渉がみられない状態であった。中期になると、Nは、パロを介して(共有して)他の利用者(M)との三項関係(NとパロとMの相互交渉)が形成する。そこでは、他者の意図理解や言語発達と深い関係をもつ共同注視(Tomasello, 1999)もみられた。後期になると、声をたてて笑うなど、Nの情動表現は豊かになってくる。また、くすぐるといったパロの反応を予測する行動、パロの行為をまねる模倣行動も出現する。意図的な模倣行動は他者との経験を共有する共感性が関与する(大藪, 2005)。

会話に困難を示す知的障害者施設利用者Nと動物型ロボット「パロ」との約1年を通じた交流を観察した。利用者のコミュニケーション行動が活性化し、二項関係から三項関係への発展がみられるなど、動物型ロボットが、他者とのやり取りの媒介(コミュニケーションツール)となることの可能性が示された。